

射の要示

一、射は射程の境界を  
かき第一善射と  
して射程を人陸  
することをも極道  
とす

粘道すべし

二、射の縁固く射  
して淨神なる  
自也を在るべし

射程に表露すべし

とこそ勸め不違  
たるべし

一、射程に人生を許  
飲し空の大地

を射得して

実世物に極極  
すべし

一、射程をばは人生

安心の大事なるは  
多敷くは他國故

不階身部此一  
即強國の大業なる

ことと自覚し射  
と事業は一枚

たるべし

以上

東宮

## 射道垂示

一、常位射理の境界に  
処し第一義諦と  
して射理に見性  
することを猛進  
精進すべし

一、一切の縁因を裁断  
して淨裸々なる

自己を莊嚴し  
射理に表現するこ  
とを勤行不退転  
たるべし

一、射理に人生を諦  
視し宇宙の天自  
然を射得して  
実世相に面接  
すべし

一、射理見性は人生  
安心の大道なれば  
無奈天地円成  
不惜身命以て一箭  
即経国の大業たる  
ことを自覚し射  
と事業は一枚  
たるべし

以上

東宏

垂示(すいじ) 〓師が弟子たちに教えを説くこと。またその教え。

第一義諦(だいいちぎ たい) 〓仏教用語・世俗を超えた究極的な真理。

涅槃(ねはん)・真如(しんによ)・実相など。

実相 〓真実の本性。不変の理法。真如。

見性(けんしょう) 〓仏教用語・本来自己に具わっている真性を見極めて  
悟りを開くこと。

縁因(えんいん) 〓仏教用語・物事の間接的な原因。

莊嚴(しょうごん) 〓知恵・福德・相好などで浄土や仏の身を飾ること。

相好(そうごう) 〓仏の身体に具わっている特徴。

勤行(こんぎょう) 〓仏前で読経・回向をすること。おつとめ

不退転(ふたいてん) 〓信念を持ち何事にも屈しないこと。修行が進んで  
すでに得た悟りや功德を失わないこと。

諦観(ていかん) 〓明らかに本質をみること。明察。本質をはっきり  
見極めること。

世相(せそう) 〓世の中のありさま。社会の様子。

大道(だいどう) 〓人の守るべき正しい道。根本の道理。

無奈・・・ 次頁を参照。

円成 〓仏教用語・円満に仏の心を成就すること。

不惜身命(ふしやくしんみょう) 〓仏教用語・最高の教えを求めするために  
命を捧げて惜しまないこと。

経国(けいこく) 〓国を治めること。

経国の大業 〓国を治めるための重大な事業。

東宏(とうこう) 〓安沢平次郎範士十段の号

弓道教本第三卷より、

### 「無発の発」

射道も、一箭に全生命力を傾倒し、全霊全我をもつて的と一枚たるところに「無発の発」というものが存在するのである。絶対一枚の射でなければ射の意義をなさないからであります。若し技巧の中であれば嘘ごとであると言わねばならない。ここに至れば一射献身の大境に常住せねばなりません。この一箭至誠の射業こそ日本魂の発露であつて、この精神こそ肇国精神の魂であります。・・後略。(安沢範士)

### 「射裡見性」

射を行うに当たっては、常に敬虔な態度と真摯な心持で臨まねばならない。その一挙手一投足も猥りにせず、法に則り道を行う自覚をもつて修行し、幸いに良師を得れば、その師に全幅の信頼を捧げ、自我を捨て大道に生きる覚悟が必要である。この気構えはただ道場内に止まらず、次第に日常生活に及び、更に修練によって平常心が常に道にあることが理想である。

総ての芸道には必ず各自の個性が現れるが、弓道には格別著しくこれが反映される。行射の場合、その態度・所作或いは気構え等により、その資性が判然表現せられる。従つて行射を觀れば、その人格・徳行・品性、更に道に対する信念まで、能く觀ずることが出来る。たとえ弓技は未熟であっても、高德なる人の行射は、どことなく高い気品と、侵しがたい見識を見出すことが出来る。・・後略。(富田範士)

### 「足踏み」

足踏みは、的心を確証してその一直線上八文字に、己が引く矢尺の中に踏み開くを原則とする。また足踏みは射を行わんとする第一の基底道であつて、丹田より発する一気発動の元となる故、その良否により射の健全化に影響するところ大である。故に、両足ともに大地に吸い付き、第二の運行に処すべき大切な動作である。すなわち正三角形の底辺とも言つべく、その頂点を支うべき支柱となる土台である。(以下安沢範士)

### 「胴造り」

胴造りは、丹田の充実を中心として落付き、絶対的静肅にて無限の動きを内蔵し、外姿もまた泰山の如く林の如き静けさであらねばならぬ。つまり全身の強き力の座は、身体の基底すなわち腰及び丹田の部分である。腰がしっかりし、丹田(下腹)の筋肉を緊張する直立不動こそ、最も強き体勢である。これが射の基礎となる胴造りである。射行はまた単に外形的な力の運行ばかりでなく、精神的運行の調和によつて完成発現するのである。・・後略。

### 「弓構え」

弓構えは直立不動の胴造りを基にして、丹田充実の静体を保ちつつ取懸けを行い、手の内を調え物見を定めるべきである。

取り懸けの懸け口は最も注意すべく、浅からず深からず、矢なりの方向に取懸けるを良しとする。取懸けはまた左右手の内にも一ツの世界であるから、左右ともに同型であるべきで、その工夫が重要である。

手の内を調えるには、拇指の根を弓の中墨にあて、中指はしっかりとし、また薬指・小指と共にこの三指が爪揃いに一枚となり、弓と真角に握るのである。それが中押となるからである。かくして七、三の割合に入れるを最もよしとする。要は丹田に根ざし、堅からず柔らからず、的心と一直線上たるべきである。

## 「物見」

物見は唯単に肉眼で的を見詰めるのではなく、丹田より発する映眼（我に映る）すなわち眞實を以て彼我一枚の境たるべきである。すなわち首を眞直ぐに保てば後頭部が天を衝き、顔面また垂直となり、その緊張相こそ気品ある風格となるのである。

## 「引き分け」

氣息と精神的運行

打起こしは、丹田を通して息気をはきつつ無限に伸び、三十三天を通貫（頭上位）し、大三に移るや呼び息氣となり、更に吸う息氣となる。これぞ大宇宙の靈氣を丹田に吸込み、徐々に引き分けの運行となるや、丹田（下腹）に緊張を加えながら、静かに息を吐きつつ会に至らしむるのである。つまり吐く息が正しい呼吸であって、決して力んだり丹田（下腹）をことさら堅くするのではない。全身の調和の正しい息でなければならぬ。すなわち上部の（胸）の息気を吐いて、胸が虚になることに依って横隔膜が下がり、丹田の力が益々充実し、運行が豊かとなるからである。

すべての動作は剣道・柔道・野球にせよ、吐く息氣とともに動作が行われるのである。眞の丹魂一枚の発動は、左記の結集的統一によって一丸となるものである。すなわち  
息Ⅱ呼吸 肚Ⅱ腹力 心Ⅱ心力 技Ⅱ骨法 以上の強き調和に依って、靈箭の発動となるのである。

打起こしより会に至る精神的運行の調和を図示すれば、下の二図のようになる。

図省略、説明のみ。（弓道教本第一二六頁、一二七頁）

### ・打起こし・大三より引分けの相

丹田を緊張し、物見を定め、映眼（心眼）を以て重視し会に至らしめ、残身も一貫しなればならない。

### ・会に至る相

つまり丹田線と大三・引分け線との合一せる相にして、ここにおいて矢は骨法に則し、無限に後方に円成するのである。

## 「会」

「会は引き分けの骨法に則し足る外観的姿勢である。即ち引き分けの無限延長線境であらねばならない。つまり「大三」より左・右・丹田と三点を結んだ正三角形の無限延長であり、すなわち三足合尖とも言うべきである。普通の伸合いと称するは、ただ形の上の延長にすぎず、これすなわち技巧の射となる。

故に会は骨法に則し、全心身を丹田に統一したる不増不減の相である。（つまり増すでもなく、減らすのでもなく、正三角形の無限延長である。）すなわち円成無発の発境にて（すなわち会という相は、背向きに無限の働きをするからである。決して矢なりの方向に動くのではない）、茲に至って始めて大発動の靈箭の射が現出するのである。然しながら、すべて己身の調和が全存在の調和の中に安住して、始めて達成することができるのであって、ただ引いて放すだけでは、射は所詮問題にならぬのである。絶対の境地に常住せんと高められた「武道」、すなわち「弓道」においては対決の方向を外より内部に向け、我自身と対決するのである。つまり的と自己、（未発千中という言葉があるが）未だ発せざるうちに的心を通貫しておるのである。

ここにおいて「的と自己」との対立は解消し、彼我一体、絶対の境地となるのである。この境こそ深遠度脱の境で、なまやさしく空想や気分のみにて到達できるものではない。故に正し

き姿勢、正しき呼吸を以て心身を統一し、おのれ自身を射中するという境地に進んで、始めて射は完成するのである。

この場合、精神面の働きは絶対不可欠の要件であつて、これを図示すれば、次のように表現することができる。(図省略、弓道教本第三巻、第一四七頁)

○円成無発の相(点線は骨法を破らぬ目に見えぬ後方無限円成相) 図略。

正調なる骨法に即し、霊肉一致映眼を以て的心を重視するのである。

この一箭こそ人生生活の縮図とも申すべく、己が身を超越し、宇宙の強き力の活動に合致せんとするのである。ここにおいて至誠一貫、質実剛健、大死一番、打牛不発の大精神があらねば到達できぬのである。

度脱||迷いの世界からさとりの世界へ導き入れること。

○完成せる会の円成相(三角形の点線は正三角形を形成、これぞ不増不減の相である)。図略。

宇宙の大霊と融和した無我の境地である。ここに氣息丹田と一枚になり、盜息があつてはならぬ。

しかして己が引く矢束を一边とした三角形の三辺は、完全なる骨法の合理化を必要とし、その三辺の釣合いは正三角形の無想円成相で、不増不減の絶対境である。この境においての発動こそ無発の発境にして、この顕現こそ莊嚴無比たとえるものなく、神の再来ともいうべく、善美を尽し、幽玄崇高にして頭がさがるのである。

「離れ」

会・離れは一貫性を持つものでこれを区分して考うべきものでない。会の円成無発、園長の中に真の離れが現出するのである。離れを求めて強き発を見せるのは脱兎離と申し、とるべきものではない。すなわち、合理的骨法に則し丹魂に全生命を打ち込み、粉骨碎身を以て円成無発の境地において靈箭を現出することこそ我らの理想である。

「弓は宇宙と融和するのだ。離れは無発でなければならない。」

「残身(心)」

残心は形ではない。すなわち七道結集の表徴である。つまり生れぬ先に生まれて居るものである。故に残身は特別造るものではなく、射を行った全体の延長表現と言つべきである。

「大射道教」で検索、阿波研造遺稿紹介―諸岡了介ウェブサイト

阿波研造の動画より引用 昭和十一年函館、「日魯春季弓道大会」の中より抜粋。

#### 正鵠（せいこく）

- 一、 身を持つるに  
厳正を的とす
- 二、 家を治むるに  
和合を的とす
- 三、 業に服するに  
精進を的とす
- 四、 友と交わるに  
信義を的とす
- 五、 世に処するに  
誠実を的とす

事業をするのに必要なものは、する力ではなく

やり遂げるといふ強い意志である。―この部分、

群馬県邑楽郡、板倉町求道会だより「無発」より抜粋。

#### 四訓

- 一、 一射絶命乾坤無発  
直心開発なるべし
- 二、 常住射裡の境涯に  
処し第一義諦として  
射裡に見性する事  
を猛進精進すべし
- 三、 一切の縁因を裁断  
し淨裸々なる自己  
を莊嚴射裡に表  
現することを不退転  
なるべし
- 四、 射裡に人生を諦観  
し宇宙の大自然を  
射得し実世相に面  
接すべし

『(1) 射は天の道なり』

① 射は天の道なり

無発

天地大團円

離脱理弦

宇宙遍満音

靈箭虚空を照らす

(2) 在来の弓術は斗争裡における強者の道のみ

② 自分は多年、弓を学んで何ら得るところがなかった。在来の所謂弓術なるなるものをことごとく窮め尽くして見たが、ただ斗争裡における強者の途より外に得る処がなかった。されば、今人の弓道なるものは、的中を本能として道なれりとするもの。

これ即ち指導者が、時代の変遷と、道の大なるを識らず、唯、小なる技巧の修練にとどまって、大綱を失せる為なるが故である。

(3) 射は人間頓悟の大法にして修身治世の大道

③ 射は、単なる精神修養や体育ではない。人間頓悟の大法であると同時に、修身・治世の大道である。元より射は、敬神崇仏の精神を基礎とするは勿論であって、射中には、総て一切の迷見煩惱を断滅して、真の自己本然の生命力の悉くを表現し、永遠の生を得て、度脱悟入するのである。如何なる苦境に往來しても泰然自若、悠々人道を行ずる、不動の境地が、開拓されるのである。

⑧ 射教は、心身度脱の妙境に到達する唯一の捷徑にして、しかも凡ての宗教を超越したる衆生済度の大教なれば。大射道教と命ぜざるを得ず。

身を修むるを弓となし、思いを矯むるを矢となし、さだめて発すれば必ず中る。

即ち、天道の弓に天地の矢を架す。天地元より全自己なればなり。万方宇宙、来たって我を証するなり。』

これは「大射道教宇都宮道場開設式における教示要綱」の一部です。

阿波 研造(あわけんぞう、1880年 - 1939年)は、宮城県河北町(現在の石巻市)生まれの弓術家・大日本弓道会八段範士。

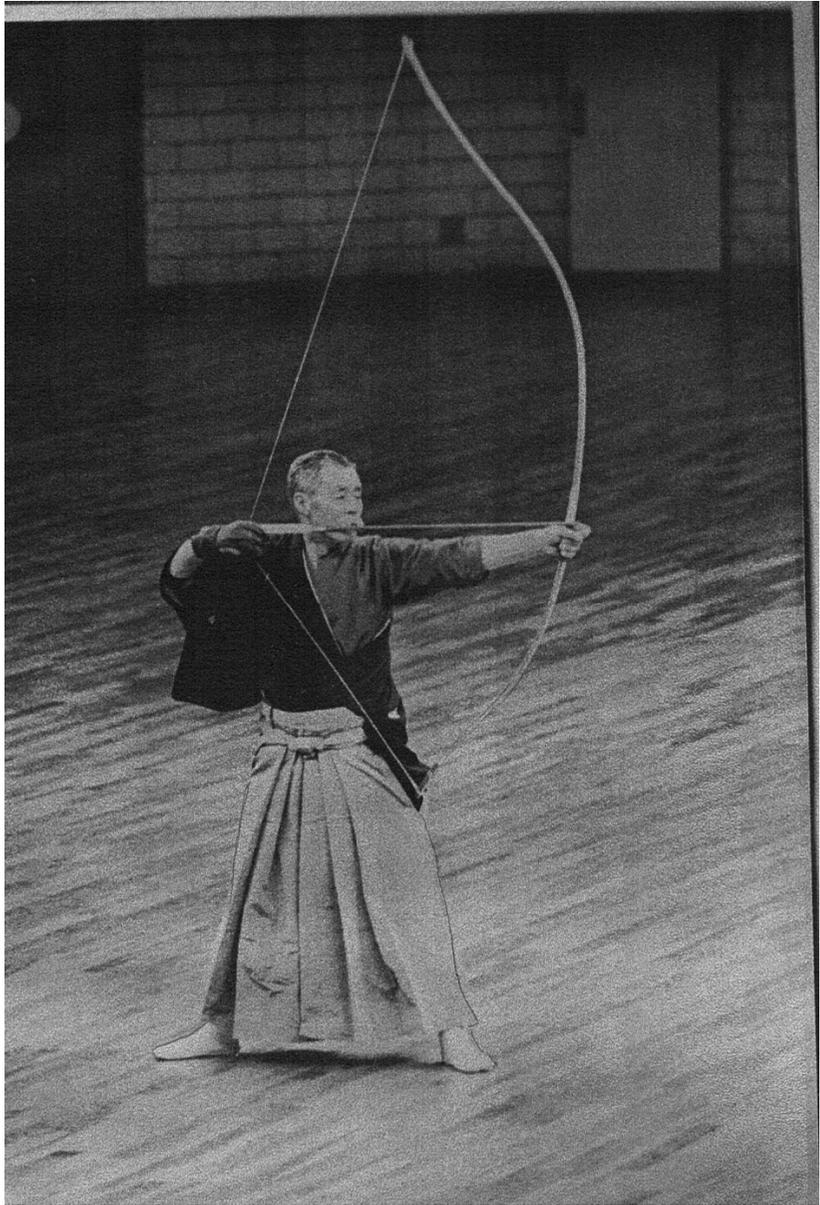
弓聖と称えられる弓の名人。その弟子に、吉田能安、神永政吉らがいる。

術(テクニク)としての弓を否定し、道(精神修養)としての弓を探求する宗教的な素養が強かった。目を殆ど閉じた状態で弓を絞ると的が自分に近づいてきてやがて一体化する。そこで矢を放つと「狙わずに中てる」ことが可能になるというのである。『弓と禅』では、オイゲン・ヘリゲルを初めとする弟子達の前で、殆ど目を閉じた状態で放射している(オイゲンが筋肉を触ったところ、筋肉にも力が入っていなかったと証言を記している)。

自身、大射道教という流派を興し、その精神を「一射絶命」という言葉で表している。阿波研造の言葉

的と私が一体になるならば、矢は有と非有の不動の中心にある。

射は術ではない。的中は我が心を射抜き、仏陀に到る。



安沢平次郎範士十段の射

雑誌「弓道」より

(あとがき)

昭和四十年千葉工大に入学し弓道部へ入部したのは同好会から部へ昇格移行期であり、千葉工大育会所属の他のクラブに如何に存在をアピールし、部としての活動を確固たるものにしようと全員が燃えていました。道場を春休み返上で手造りしたのもこの頃でした。この時期熱心に指導していただいたのが当時教士七段の林初男先生でした。匝瑳高校の実績にみるように指導には定評がありました。春、夏、秋の合宿は八日市場の射学林で行い、そのための宿舎についても面倒をみていただきました。林道場に掲げられていたのが林先生の師匠である安沢先生の垂示でした。

定年後古文書を趣味にしており、インターネット上で偶然、垂示の画像を見つけたその瞬間、射学林が想い出され読み解きを思いついた次第です。辞書には出ていない、境地といったものは、凡人の理解の外であります。が多少なりとも真意理解に寄与するため、「弓道教本」や「大射道教」抜粋の記述を示しました。

さらに調査の過程で安沢先生の師匠である阿波先生の動画も見つけそこから、「正鵠」、「四訓」を抜粋しました。

永らく弓道から離れていた私は林初男先生が平成二十三年五月に範士九段の称号を授与されたことを玉城清剛君から伝えられ、林先生をお訪ねしお祝いを申し上げる際のお土産とするため本資料を作成したことを申し添えます。

本資料が、弓道に親しむ会員諸兄の参考に供することが出来るなら望外の喜びであります

平成二十五年四月

井田晃(六回生) 記

## 「射道垂示」の読み解き

補足（弓道教本第三巻より抜粋）

- 「無発の発」
- 「射裡見性」
- 「足踏み」
- 「胴造り」
- 「弓構え」
- 「物見」
- 「引分け」
- 「会」
- 「離れ」
- 「残身（心）」

阿波研造遺稿紹介―諸岡了介ウェブサイト

阿波研造の動画より引用 昭和十一年函館、「日魯春季弓道大会」の中より抜粋

「正鵠」

「四訓」

「大射道教」

「大射道教宇都宮道場開設式における教示要綱」の一部

安沢平次郎範士十段の射

あとがき

謝意

「射道垂示」を読み解きに当たり、辞書では説明できない部分が多くあり、補足の意味で、弓道教本における安沢範士の記述を転載するとともにウェブ上から、安沢範士の師である阿波研造の動画中から垂示に関係あると思われる「正鵠」「四訓」、その他を抜粋させていただきました。恩師林先生はじめ参照させていただいた資料の関係各位に対し、感謝の意を表します。

井田 晃